

奥河内音絵巻

山を鳴らす Project

9/10 SUN

木と奏でる 人々の歌

市文化振興財団が毎年開催しているかわちながの世界民族音楽祭は今年で24回目。3年前からは、河内長野の木材であるおさか河内材を使用した楽器や衣装、ステージを参加者やボランティアの手で創り上げる「奥河内音絵巻」に取り組んでいます。今年「山を鳴らす」木と奏でる人々の歌をテーマに市内外から150人以上が参加。のこぎり演奏家で作曲家のサキタハヂメさんが芸術監督を務め、その他多くのプロミュージシャンやラブリーホール・ミュージカルスクールの生徒らも参加しました。今回は楽器製作から本番までの市民奏者のみなさんの様子を追いかけてみました。

個人練習から集団での練習へ

パート練習で音を合わせるのは大変でしたが、指導者の指示のもと少しずつ上手になっていきました。お互いに音やリズムを確認し合う姿はアーティストの姿そのもの。全体練習ではオッカサンとオカンテレ以外にもオカンナやのこぎり、プロミュージシャンなどの楽器隊も加わります。今までの練習とは違い全体で合わせると自分の音と他の楽器との音量のバランス調整や、ステージ進行に合わせた演奏をする必要があり、何度も練習を重ねました。

はじめて参加して

出口さん（オッカサンで初参加）

楽器を手作りして奥河内ならではの音を出そうというコンセプトに興味を持ったことが参加のきっかけでした。手作りの楽器なので調弦が難しく、指導してくれる先生やまわりのみなさんのアドバイスで少しずつ修正していききました。きちんとメロディーを弾けたときはうれしかったです。本番では奥河内の音楽として表現でき、河内長野の魅力を再認識することもできました。また参加したいと思っています。

楽器製作は半年前から

楽器製作のワークショップは本番半年前から始まりました。おさか河内材を材料とした3弦のオッカサン（写真左）と、5弦のオカンテレ（写真右）。木材を組み合わせて形を整えていきます。不慣れな道具を使って苦労しましたが、自分だけの楽器を作ることができ、みんな笑顔になりました。

芸術監督のサキタハヂメさん（市内在住）

「河内長野には世界に発信できる魅力的な素材がたくさんあります。それを使って唯一無二の、美しく楽しい世界観を作りたい。世界中からここに来てもらったり、世界中で公演したりしながら、たくさんの笑顔を作れたらいいな」と語るサキタさん。今回の公演でも全編作曲を担当し、舞台演出やステージセットなどをプロデュースしました。「山を鳴らす」「木を面白いがる」をライフワークに奥河内の自然や人々からインスピレーションを受けた「まつり」を創る。その可能性は無限大です。